

マルサスとケンブリッジ帰納論者：ヒューウェル宛マルサス書簡を通して

山崎 好裕（福岡大学）

はじめに

マルサスは1829年、1931年（2通）、1933年に渡ってヒューウェルに4通の書簡を送っている。この書簡の内容は、ケンブリッジ帰納論者と呼ばれるヒューウェルとジョーンズの方法論との違いを通じて、マルサスのこの時期の方法論について詳細な情報を与えてくれるものである。

そもそも、マルサスの立場は演繹主義と帰納主義のどちらかに偏るものではなかった。本稿を通じて明らかにするようにこの立場は、ヒューウェルやジョーンズらケンブリッジ帰納論者との書簡のやり取りを経た後も一貫したものであったことが、本稿を通じて明らかになるであろう。

1. 『経済学原理』における方法論

マルサスは『経済学原理』初版において、序論を通じて経済学の方法論を述べている。まず、マルサスは経済学には一般化の傾向が強く存在することを指摘する。

「経済学においては単純化しようとする願望があつて、そのため、特定の結果を生み出す場合に一つ以上の原因が作用するのを認めながらないようにさせている。」（マルサス [1820] 24 ページ。）

ここに見られるのはマルサスの基本的な考えである、物事には複数の原因があるという認識である。たとえ、有力な原因が一つ見つかったとしても、それにすべての説明を任せるわけにはいかない。通常、多くの原因が作用しているからである。

「少数の有名な人びとは、経済学の一般的通則にきわめて強い愛着をもち、そのため、実際にはそれにはある例外がときどきおこるということを知っているのに、公衆の注意を余りにも多くまた余りにもしばしば例外のほうへ向け、ついには一般的通則の威力と有効性とをそこなうにいたることをおそれて、この例外に留意することを賢明で得策であると考えることをしないのである。」（同上、33 ページ。）

それはリカードウなど「少数の有名な人びと」が経済学の「一般的通則」に強い愛着を持っていることに影響され、「例外」的な現象について見ることを忘れていた。実際には、この例外の方に真実が含まれているかもしれないのである。

だが、全く「一般的通則」を考えずに現象のみを追っていくこともまた逆の過ちに繋がることになる。たんに併存する現象が誤って原因と結果の関係として捉えられてしまうことも起こり得る。この場合には、「一般的通則」からの援用が行われていないからである。

「こうした研究方法においては、単純化の傾向から生まれる誤りとは反対の種類の誤りにおちいる可能性があることを、わたしは十分に知っている。たんに共存するだけでかつ偶然にすぎない外見（appearance）が原因と誤りみられることもあろう。そしてこの誤りにもとづいて構成された理論は、複雑でもありまた不正確でもあるという二重の不利益をあわせもつであろう。」（同上、41 ページ。）

マルサスはここで帰納法の話をしている。すなわち、現象の原因を探り、その原理に辿りつくものとして帰納科学としての経済学を見ているのである。しかし、その原因を一つの原理に絞り、事物の説明で専ら演繹的に使用するのには誤りなのである。事物には複数の原因があるのであり、それらを総合的に考えなくてはならない。

他方で、単に同時に生起する現象の間に因果関係を見出す過ちも避けなくてはならない。このためには、帰納のみを専らとするのではなく、原理から演繹的に考えることもなくてはならないであろう。

このように、マルサスは当初から帰納と演繹とを総合した柔軟な方法論を持っていたことが分かる。実際、マルサスは 1836 年の『経済学原理』第 2 版においても、方法論について書かれた序論については一切の改定を行っていない。

2. ケンブリッジ帰納論者のマルサス方法論観

ケンブリッジ帰納論者の実態について、久保 [2010] のまとめを中心に確認していこう。

ヒューウェルはマルサスの帰納主義的に見える傾きに共感を持ち、接近を試みていくことになる。ケンブリッジ帰納主義の陣営の柱としてマルサスを立てようという意図があったと想定されるのである。

しかし、既に見たようにマルサスは単純な帰納論者ではなかった。彼は演繹的な「一般的通則」の必要性も最初から強調していたからである。そこで、マルサスは、ヒューウェルと同じケンブリッジ帰納論者であるジョーンズのリカードウ批判について書簡のなかで嗜めていくことになる。

ヒューウェルが経済学の方法論として帰納法を徹底するべきだと考えた背景には、久保が「歴史化された科学方法論」と呼ぶものがあつた。この方法論では、科学にはその歴史的発展段階に従った方法が存在すると考える。帰納を十分に経て「一般的通則」を確立した、ニュートン力学のような段階では、そこでの方法論は演繹主義になるであろう。しかし、帰納が不十分な段階で演繹主義を用いること自体誤りであり、そこでは最後まで帰納主義が徹底される必要がある。そして、何より経済学は未だ始まったばかりの学問であり、使うべき方法は帰納法のみであるべきなのである。

「歴史段階に応じて適用すべき方法が異なるというヒューウェルの上のような認識—以下「歴史化された科学方法論」と呼ぶ—をジョーンズは同 1831 年に出版された『地代論』の序文のなかで基本的に踏襲する。」(同上、110 ページ。)

ヒューウェルやジョーンズなどのケンブリッジ帰納論者は、マルサスに比べて帰納の純粹性を楽観的に考えていたと思われる。そこに、単純な帰納主義への批判をも持っていたマルサスとの大きな違いがある。ヒューウェルたちにとって、リカードウ経済学の基づく「一般的通則」は単なる「予断」であって信頼のできないものであったのである。

ケンブリッジ帰納主義者に括られるヒューウェルとジョーンズは、マルサスに帰納主義への傾きを見て接近を試みた。ヒューウェルは、経済学はニュートン力学のような演繹科学となるには未熟であり、当面は帰納主義の立場を徹底し、原理の確立に努めなくてはならないと考えていた。

これに対して、マルサスの場合は単なる現象の羅列では因果関係と並列関係の区別がつかないと考えていた。そこでマルサスは確立された「一般的通則」はこれも用い、演繹的な展開を行うことも必要であるとしていたのである。ただし、「一般的通則」には多くの「例外」もあり、これに目をつぶることは許されないと考えていた。

3. マルサスの 1930 年代初の方法論

マルサスが最初にヒューウェルに送った書簡は 1829 年のものである。この最初の書簡のなかで、マルサスはペロネット・トンプソンの『地代の真実理論』を取り上げ、リカードウの差額地代論を批判していることに対して、次のように述べている。シンプソンは等級の異なる土地が連続して存在していないところでも、需要に対する供給に制限があれば地代が生じうるし、そちらの方が一般的な地代の原因であると批判した。このことに対する反批判である。

「リカードウ氏が言及している私の元の著作が特に目指したのは、通常の地代と、トカイ¹の葡萄畑のような全面的で厳密な独占が生み出す地代とをはっきり区別することでした。私は、地味の異なる土壌が連続的にあることは、地代の存在にとって必ずしも必要ないという点で、トンプソン氏に全面的に同意します²。…トカイの価値の上昇には、ご

¹ ハンガリーのワイン産地。

² 最も一般的に言って、確かに供給が制限されているときに需要が十分にあれば、地代が生じる余地があると言っていい。高級ワインなどある生産量以上が生産不可能な場合の市場の需給の状況を考えてみよう。こうした状況では供給曲線はある生産量のところで垂直になり、それ以上の供給ができないことが示される。必需財である小麦とは異なり、マルサスも言うように高級ワインに対する需要は富裕な消費者の需要スケジュールに従うから、需要曲

く一部の消費者の富や気紛れから来る限界以外になんの制約もないのです。ですから、この比較は残念なものだったと言わざるを得ません。」

マルサスは地代を一般的に説明できるのはリカードウの差額地代論であって、トカイの葡萄酒のような単純な独占理論ではないと言っている。ただし、独占の場合でも地代は説明できるのだからトカイのケースは「例外」に相当するのである。

この議論を受けて、『経済学原理』第2版では、第3章第1節の末尾に注を付け加えている。

「さて、第一にトウケイ³葡萄の価格は必要価格ではない、ということは明らかに真実である。価格は余程ヨリ低廉であっても同一分量が生産されるであろう。第二にトウケイ葡萄の購入者もその耕作者もその生産物で生活しているのではない、ということも真実である。そして、第三に、少数の富裕な個人の嗜好および財産以外にトウケイ葡萄の価格に対するどんな制限もない、ということも真実である。」(マルサス [1836]、205 ページ。)

つまり、トカイの葡萄酒の生産は重要ではあっても地代論にとっては「例外」をなすのであって、一般化することは決してできない。あくまでも、地代に関する「一般的通則」はリカードウの差額地代論なのである。

マルサスは1831年の前半にもヒューウェルに2通の書簡を送っている。ここでは、主にリチャード・ジョーンズの『富の分配と課税の源泉』が主題となっている。

1831年の2通目の書簡ではマルサスはより明確にリカードウの差額地代論を擁護しようとする。

「私の現在の理解では、大勢はリカードウ氏に厳し過ぎるようです。また、私は、ジョーンズ氏も、それとは違うものの少し誤ったコースを辿っているように思えます。地代増大の唯一の原因として農業資本の収穫逡減について考えた際に、リカードウ氏が全面的に間違っていたということを示したいという情熱のあまり、確かにそれはそうなのですが、ジョーンズ氏は、限定された空間のなかでは、農業や工業の技術改善で妨げられなければ、そのような収穫逡減という自然な傾向があるという、疑う余地のない真理をも否定する傾向があるようです

線も通常のそれと同じように右下がりである。供給曲線が右上がりになる数量を超えて需要があると、垂直な供給曲線に沿って価値が上昇していく。こうして高級ワインの市場価格も高騰するが、高級ワインの畑を借りている農業資本家はこれによって超過利潤を手にする。これを見た他の農業資本家は、地主に対して地代を払っても自分に貸してほしいと交渉を始めることになる。こうして地代の競り上げ競争が始まり、結局超過利潤が消滅するところまで地代が押し上げられていく。

³ トカイに同じ。

4。」

書簡においても、マルサスは『原理』と同様の立場からリカードウを擁護し、ヒューウェルらを牽制しているように見える。マルサスは、ヒューウェルらのように科学を帰納主義の段階と演繹主義の段階と分けることはできず、帰納と演繹を渾然一体とさせながら経済学を進歩させていかなければならないと考えているのである。

おわりに

マルサスの体系においては、「一般的通則」として認められたものから因果関係が導出される必要があり、同時に「例外」や複数の原因をなす事象もまた総合的に捉えられなくてはならないのである。

この意味で、マルサスの方法論的立場は『経済学原理』初版から一貫したものであり、帰納主義のみをことさらに強調するものではないと言えよう。

この論戦は、戦後アメリカの経済学界で経済学方法論を巡って戦われたフリードマンとサミュエルソンの論争に似ている。フリードマンは演繹の基礎に置かれる仮定の現実性は全く問題でなく、そこから導かれた諸命題を現実のデータで検証した場合に、実証可能であるかどうか重要であるという「実証経済学」の方法論を展開した。彼の立場は、理論的仮定はむしろ非現実的なまでに単純なものであることが望ましいというものであった。

これに対してサミュエルソンは、フリードマンの方法論をFツイストと揶揄し、仮定の現実性を何らかの方法で検証する作業は欠かせないとした。

⁴土地の肥沃度が3段階に渡っている場合の差額地代の発生状況を考えよう。もっとも肥沃な土地が耕作され尽くすと穀物をそれ以上提供できなくなるため、次の等級の土地へと耕作が広がっていく。地味が全く異なっているから、必要な限界費用は階段状に高まり、図に見るように最初の等級の土地の供給曲線との間に階段状の段差ができる。やがて、2番目の等級の土地も耕作され尽くすと最も劣等な土地まで耕作が進むが、やはり先ほどと同様に供給曲線には段差が付くことになるのである。

穀物の需要曲線は垂直になる。高級ワインのときとは異なり需要曲線が垂直になるのは、穀物が必需財であり人口によってその需要が一義的に決定されるためである。穀物の価値は階段状の供給曲線と需要曲線の交点の高さになるが、その場合、上から2番目の等級の土地と最優等な土地を借りている農業資本家は超過利潤を得ることになる。それを見た他の農業資本家は高い地代を払ってもより優等な土地を借りようとするから地代の押し上げ競争が始まり、最終的には最優等な土地、2番目の等級の土地で超過利潤が得られなくなるところまで続く。

最優等地の地代が一番下の水平線と一番上の水平線との垂直方向の距離として、2番目の土地の地代が真ん中の水平線と一番上の水平線との垂直方向の距離として示される。

こうした旧世界のイギリスで成り立っていると考えられる差額地代の状況に、新世界の諸国の状況も経済発展や貿易を通じて接近していくことを、マルサスはリカードウ擁護論として主張しているわけである。

もちろん、リカードウは F ツイストの立場に与するものではないだろうが、ヒューウェルは現実的な諸前提なり諸公理を帰納によって導くべしというサミュエルソンの立場からリカードウを批判しているのである。

マルサスの立場は、リカードウの論理志向に対しては複雑な現実を踏まえた反論を与えつつも、ヒューウェルらの帰納原理主義にも諸手を挙げては賛成できない、というものであったと推測される。

佐々木 [1996] によれば、「マルサスは、経済現象に影響を及ぼす主要な諸原因をできるだけ考察に含め、原理と経験的事実の適合の可能性を高めようとしていた」⁵。「一般的通則」から演繹された内容と経験的事実の対応を重視する点で、むしろ、フリードマンの実証経済学の方法論に近いと言っているかもしれないのである。

【引用文献】

久保真「ヒューウェルとジョーンズ、そして『帰納科学としての経済学』」

(只腰親和・佐々木憲介編『イギリス経済学における方法論の展開：演繹法と帰納法』昭和堂、2010年。)

佐々木憲介「マルサスにおける帰納と演繹」(『北海道大学経済学研究』第45巻第4号、35-48、1996年。)

山崎好裕訳「マルサスからヒューエルへの4通の書簡」(『福岡大学経済学論叢』第56巻3・4号、2012年。)

De Marchi, N. B. and R. P. Sturges, 1973, 'Malthus and Ricardo's Induction Critics: Four Letters to William Whewell,' *Economica*, n.s., 40.160: pp.379-93.

Malthus, T. R., *Principles of Political Economy*, 1820 (小林時三郎訳・マルサス『経済学原理』(上)、岩波文庫、1968年)

Malthus, T. R., *Definitions in Political Economy*, 1827 (玉野井芳郎訳・マルサス『経済学における諸定義』岩波文庫、1950年)

Malthus, T. R., *Principles of Political Economy*, ed.2, 1836 (依光良馨訳・マルサス『経済学原理』(上)、春秋社、1949年)

⁵ 佐々木 [1996]、46ページ。